稲穂の思い出 創刊20周年

都市圏と南信州を結ぶ…みらい

福澤 郁文（高18回）

『継続は力なり』という。20年前に『稲穂』の編集とデザイン設計などを担った編集人として、とてもうれしく思う。ここまで編集と発刊に携わってこられた皆さまに敬意を表したいと思います。

原稿依頼からはじまり、取材をし、寄せられた原稿を読み込むことからはじめ、原稿整理、割り付け、編集、校正、印刷入稿後の製本まで、時間と多くの工程を経て『稲穂』の冊子ができあがる。

発刊は年1回とはいえ、そこにいたるまでの編集にかける時間など、制作は容易ではないですね。

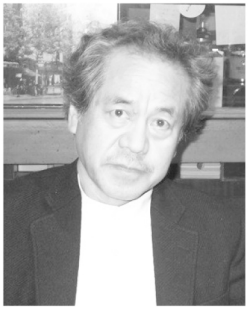
『在京の飯田高校同窓会をつなぐ新聞をつくりたい…』と、当時の在京同窓会長の故平田達氏からご相談を受けた。そのころ、私は新宿御苑前に小さなデザイン事務所を開いていた。

私たち一八会の総会幹事担当年の時に「『NGO＝国際協力活動とボランティア、そして教育』市民による海外協力の会＝シャプラニール30年の活動から…」と題し、私が講演する機会を得られたことによる。

1971年、バングラデシュの独立戦争直後、バ・農業復興奉仕団の一員として、私は混乱の地、バングラデシュへ救援活動の働く機会を得た。そして、帰国後、バングラデシュの子供たちへの教育支援活動を立ち上げた。その活動は、昨年で50周年を迎えた。

現在ではグローバルサウスやSDGsの問題として、世界の経済格差から環境問題等を含めて、さまざまな課題は、いま解決の難しいものである。当時は開発途上国ともいわれ、貧困格差と教育を受けられない子どもなど大きな課題を抱えている国が少なくなかった。

私たちは政府開発援助ODAの質的改革に向けての提言や、市民による海外協力活動の必要性などを訴えてい



●ふくざわ・いくふみ
豊丘中学校出身。高校ではブラスバンド部所属。武蔵野美術大学を卒業し、グラフィックデザイナーに。現在は豊丘村に暮らす。農とアートを楽しむ生活。シャプラニール／開発教育協会／風の学舎／日・バ協会に所属。

た。

平田先生からは『君のデザイナーの仕事もみた。活動も知ることができた。いま、わたしは在京の飯田高校の同窓会をつなぐ新聞を発行したいと考えているが、協力してくれ』と。それから2回ほど昼食にも誘われた。

新聞では捨てられてしまうし…できるならば『早稲田文学』とか『三田文学』のようなものならやってみたい、と私の気持をつたえた。問題は出版印刷費用だった。

編集を通して諸先輩との出会いがあった

初めての編集委員会が開かれる。なかに旧制飯田中学41回卒の林京平氏が参加されていた。お話を伺ううちに、私の戦死した叔父と中学の同級生であったことを知り、たいへん驚いた。戦死した叔父の記録は、わが家に残された1冊のアルバムのみだった。が、若き叔父を知ることのできる唯一の記録としてあり、戦死とともに遥か遠い存在として崇めていた。『もし、いまも生きてくれていたなら…』。当時のアルバムを開きながら想像していた。『寿朗はとても優秀な人だったに…』と、いつも祖母から聞かされていた遠い叔父の存在が甦えるかのように思えたのだ。林先生は当時、財団逍遙協会の理事長でもあった。編集会議での落ちついたお話しぶりに、亡き叔父の姿を重ねるような気持ちがあり、編集会議が夢のような時間になる。

同窓会誌『稲穂』の名称は、牧内雪彦氏の提案で決まる。他にも候補がいくつも上がるが《トウスイ》の響きに意外性もあり、編集会議の最後につよく推した記憶が残る。初代編集長には金田明夫氏が決まる。以後の永い年月にわたり泰阜村出身の金田さんの、こころ優しくも芯のある哲学者のような人柄に接することができ、それは、故郷との交流事業『南信州フォーラム』の10年の展開に続いていくことにもなっていく。

創刊時の編集委員の方々＝(左から)金田明夫さん、平田達さん、牧内雪彦さん、岡村隆臣さん

編集会議のあとの宴のじかん

会議の後のお食事会が、また楽しかった。平田法律事務所スタッフの中川さんによる、毎回の料理メニューはいつも意外性に富み、素晴らしかった。一八会の黒柳文子さんも、編集委員への連絡通信業務や会計など含め、裏方をつとめながらも毎回のように、南信州の郷土料理を運んでくださった。胡瓜の粕もみ、シオイカやふろふき大根まで、季節ごとの郷土料理を味わえる楽しみがそこにあった

編集会議の後はみんなで乾杯！

あのときに『稲穂』編集企画へのお声をかけていただき、私も在京同窓会の一翼を担うことができた、と感謝とともに思い返す。しかし、当時の私は、ＮＰＯ組織の委員などいくつも抱え込みすぎていた。自宅に帰ることもママならないほどの仕事量に追われる不自由業が続いていた。

いま故郷の南信州に戻って3年目

「コビット19」厳戒態勢のなか、コロナ防御に向けてパンデミック宣言が政府からだされた。仕事場の移転にともなう、引越し荷物を降ろしながらその宣言を聞いた。

いま、豊丘村の実家には高齢の母親がひとりでくらしており、百歳を前に病気をしたこともあり、だれかが支えざるをえなくなっていた。

この春、ある雑誌で飯田市は、人口5～10万人の地方で『暮らすなら希望の都市は？』の読者投票で1位になる。南信州の自然の美しさはもちろん、地域は子育てにも適しており、文化的な魅力にも満ちているのだと…。

雄大な南アルプスと中央アルプスの峰々に囲まれ、四

季折々の季節の変化にともない、豊富な果物はじめ新鮮な農作物がある。山間の程よい空間に生活する人びとの、伝統文化やまつりにも活力があり、多くのひとたちは生活にとりこんで、趣味などを楽しんでいる。

音楽活動も美術や造形などの表現活動も、また短歌や俳句をはじめとして、民俗学や歴史的な資料研究なども盛況だ。

スポーツをはじめ、数々のサークル活動の様子は、都会の文化にも劣らないほどである。

わたしの母親を取り巻く環境をみていて驚くのは、村の社会福祉協議会をはじめ、病院や施設などのネットワークがとてもいいと感じる。老齢化を支える福祉が充実し、整っているところも魅力的だ。と『おったえしとくに…』。

楕円の支点のように2つの生活圏をつくる

いま都市圏に人口が集中しているのは世界的な傾向でもあるが、近未来には、都市と地方との双方の生活を楽しむ手段は、もっと創りだされてもよい。

首都圏を中心とする同心円的で、経済的な人間の営みを楕円形の軌道のように、もうひとつの支点をもつ運動体に変えていくことはできないだろうか。

南信州は空も楕円形であるように、同心円的文化ではく、価値観の異なる2つの支点から、今の時代に発信していく力がほしい。

我々のNGOは、この50年間に、バングラデシュ、ネパールとの協力活動を続け、交流をふりかえってみると、意識的に双方の視点で世界を考えるようになっている。

とくに在京の同窓会の皆さん、これからは南信州に帰郷する機会を創りだしてほしい。芸能や文化的な催しへの参加などなど…、新しい交流のかたちを創りだしていただきたいと願う。

ある日の編集会議